

「初等教科省察研究 I（外国語活動）」の授業評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概要

「初等教科省察研究 I・II」は、教育実習を終了した 3 回生に対して開講される授業であり、「教育実習前に受講した初等教科科目及び附属校園等での教育実習を通して得られた課題を少人数での講義、実験、実技、模擬授業等を通じて省察し、小学校における教科の専門的知識や技能を発展的に学習し、初等教科の教材研究や学習指導法について理解を深める」ことを目的とする科目である。受講生は、学期前半 (I) / 後半 (II) に開講される 5 科目程度の中から、それぞれ 1 つを選択する。「外国語活動」も学期前半の選択肢の 1 つである。

「初等教科省察研究 I（外国語活動）」は、「外国語活動」を担当する教員に必要とされる知識・技能の獲得をねらいとする講義・基礎的演習であり、実質的に愛媛大学教職課程カリキュラムにおける唯一の「外国語活動指導法」の授業である。

この授業の目標は次の 4 つである—この授業の終了までに、受講生は、

- (1) 小学校英語活動がこれまでにどのようなようになってきたか、「外国語活動」がどのような理念と内容を持つものなのかを理解している。
- (2) 様々なタイプの小学校英語活動の活動を体験し、明確な活動イメージを持つことができるようになってきている。
- (3) 「外国語活動」の実施上の留意点を理解している。
- (4) 「外国語活動」を模擬的に実施するという体験を通して、外国語活動についての基礎的実践知を育むことができている。

これらの目標を達成するために、次のようなテーマや活動で 7 回の授業を構成した。

- (A) これまでの小学校英語活動の概観
- (B) 学習指導要領における「外国語活動」の内容（重要ポイント）の確認
- (C) 「外国語活動」のバリエーションの体験
- (D) 「外国語活動」の留意点の理解
- (E) 「外国語活動」と「外国語（英語）」の小中連携に関する議論
- (F) 授業実践 DVD を使った授業観察&分析
- (G) 「外国語活動」担当教員のための英語発音基礎トレーニング
- (H) 受講生による模擬授業

2. 授業評価方法

授業の成果と課題についての情報を得るねらいで、最終授業で受講生にアンケートを実施した。主な調査内容は、(1) 目標の達成度、(2) 授業で扱った内容や活動の重要性、(3) 改善への提案である。なお、平成 24 年度の受講生は 6 名であった（アンケート回答者数も同じ）。

3. 授業評価結果と考察

まず、本授業の目標がどの程度達成できたかについて、「1」（＝全く達成されなかった）～「5」（＝十分に達成された）の 5 件法尺度アンケートで、受講生に評価してもらった。結果は次の通りである。（以下の表 1 の(1)～(4)については「授業の概要」セクションを参照。）

表 1. 授業目標の達成度の認識

	1	2	3	4	5
(1)	-	-	-	5	1
(2)	-	-	-	3	3
(3)	-	-	1	4	1
(4)	-	-	1	3	2

回答は「4」にまとまっており、受講生の認識としては、目標はおおよそ達成されたということになる。これは授業担当者の印象とも一致している。ただし、目標 (1) (3) などについては、授業アンケートによってその評価を行うのが妥当なのかどうか検討が必要である。（同時に、知識・理解に関する目標とは言え、時間的制約を考えると、他の授業内容を削ってまで試験を行うようなことはしたくないとも考える。）

次に、扱った授業内容に対する重要度について、「1」（＝全く重要でない）～「5」（＝大変重要である）の 5 件法尺度の質問を用いて、受講生に判断を求めた。結果は次の通りである。

表 2. 扱った内容の重要性

	1	2	3	4	5
これまでの小学校英語の概観	-	-	1	1	4
学習指導要領の「外国語活動」の内容の確認・理解	-	-	-	1	5

様々な英語活動の体験および考察	-	-	-	-	6
「外国語活動」実施上の留意点の検討	-	-	-	-	6
「外国語活動」の授業実践DVDの視聴と分析				2	4
受講生による模擬授業の実施および考察	-	-	-	-	6

「これまでの小学校英語の概観」に対しては、「3」を選択する受講生もいたが、一方で、「今までの流れをつかむと、今変わろうとしていること（教科化など）もつかみやすい」という回答も見られた。例年、特に実技系の内容（e.g. 活動体験、模擬授業）に比べると、「すぐに役立つ」訳ではないため重要度の認識は低くなる傾向があるが、「外国語活動」の理念と内容を的確に理解するためには、小学校英語のこれまでの経緯をおさえておくことは大変重要だと考えている。

「様々な英語活動の体験」と「外国語活動」実施上の留意点の理解はセットにして扱った。つまり、担当教員が10程度の英語活動を模擬授業のような形で実施し、体験した活動についてその原理や留意点を確認するというアプローチをとった。（留意点については、授業担当者が過去5年程度にわたって教育現場で行った授業参観や文献調査に基づき、42のポイントとしてまとめた資料も活用した。）これらの内容については、受講生全員が「大変重要である」と回答している。体験と省察の往還の重要性の認識を示している結果とも解釈できる。授業者としても、留意点を最初から講義の中で（脱文脈化された）知識として提示しても、また逆に単に活動を体験するだけでも、高い効果は得られないのではないかと考えている。

また、「受講生による模擬授業」についても、全員が「大変重要である」を選択した。「外国語活動」は、受講生自身は小学校の時に受けた経験のない内容であり、必ずしも教育実習でも授業を行っている訳ではないため（実際に、6名の受講生の内「外国語活動」の授業経験のある学生は2名であった）、大学生相手とは言え自分で考えたことを実践してみる機会は、他の教科において以上に重要と考えられる。「体系的な知識（理論）をまずしっかりおさえてから実践」という流れよりも、「体験（及び実践）しながら考察する＋理論的知識と関連づける」というアプローチが有効であろう。

課題と改善

「初等教科省察研究Ⅰ（外国語活動）」には、いくつかの課題も残った。まず、授業計画と実施内

容が異なった点として、「英語発音基礎的トレーニング」が実施できなかったことがあげられる。これは、「外国語活動」担当者のための、楽しみながら英語と日本語の音に対する理解を深める講座であり、日本語文の英語リズム読み、アルファベット発音の留意点、English 575、特殊カナを利用した発音練習、テレビCMを利用した聞き取り、「声の表情で意味の違いを伝えてみよう」などの内容を含んでいる。今回実施しなかったのは、受講生6名の内5名は、内容は異なっても別の授業（＝英語音声学）において英語発音トレーニングを受けており、他の授業内容に比べて優先順位は低いと判断したためである。ただし、発音トレーニングを受けていない、小学校教員志望者には意味のある内容だと考えている。

改善への提案として、受講生からは次のような回答が得られた。

- ・ 現場の先生の実際の声の聞いたり、近隣の小学校での活動を見てみたいと思った。
- ・ 15回にして欲しい。（他にも1名。）より深く学ぶことができる。さらに通年で可能であれば、小学校において実際に見学した方がよりイメージしやすいのではないかと思う。
- ・ 他に小学校外国語を扱っている授業がないので、小学校志望の学生にはできるだけ受けてもらうように宣伝する。

ゲスト・ティーチャーの招聘やフィールドにおける授業観察については、（今年度行った授業実践DVDの視聴に加えて）次年度以降検討することにする。最後の2つの回答は、ある意味授業担当者にとっては光栄な内容であり、この「外国語活動指導法」に関する授業を、小学校教員養成の一環としてより有効に活用する方法についても考えてみたい。

4. まとめ

今年度実施した「初等教科省察研究（外国語活動）」は、目標の達成、内容の有用さの点ではまずまずの成果をあげることができた。「外国語活動」に関して検討すべき事項は多岐に渡り、今回の授業では十分に扱えなかったテーマも多く存在する。「外国語活動」の評価のあり方、ティーム・ティーチングの進め方、*Hi, friends!*（多くの学校で使われている教材）の内容紹介、電子黒板の有効的な活用、クラスルーム・イングリッシュの練習などはそのいくつかである。また、より長期的には小学校における「外国語（英語）」の教科化やモジュール学習への対応なども意識しながら、「外国語活動指導法」の内容も改善を続けていかなければならないと考えている。